

〔総論〕

## 『浄土真宗総合研究』第18号のテーマと各論文

寺 本 知 正

本『浄土真宗総合研究』第18号の統一テーマは、「仏教における教団―歴史と現在―」である。浄土真宗に関する学問体系に関しては、まず、記述的立場からなされる歴史学領域と文献学領域とがある。これらは、可能な限りの主体の関与を排することで成り立つ領域であり、その記述的領域の成果における妥当的客観性に基づいてなされる規範的立場の領域が、教学領域と実践学領域である。この教学と実践学においては、逆にどのように主体を関与させようかが方法論の要となってくることであり、真理と主体の体系的考察がなされるのが、これらの領域である。こうした、浄土真宗に関する学問の総合的組織体系のなかで、それぞれの領域が交渉を持つてこなかったことが、これまでにもしばしば指摘されてきた。例えば、教団論の欠如がいわれて久しいが、このことは、教団とはいかにあるべきかという規範的立場からの論考が、教団とは歴史的にこうあつてきたという事実に基づく記述的調査・研究と、十分によく交渉してこなかったことが原因の一つであろう。同様のことは、儀礼論に関しても、浄土真宗の儀礼はこうあるべきだという論考はあるが、実際の事実として全国で儀礼はこのように執行されてきたという歴史学領域の調査・研究には基づかないままである。記述的立場の研究成果に基づかないままに各々の研究者の主体が前面に出た論考では、客観的な検証や議論の共有がなされえず、必然的に論が成立しないこととなつてき

た。

今号においては、教団論を取り上げ、「歴史と現在」という副題で、それぞれの研究員が歴史学との接近をはかり、その成果に基づいた論考を展開している。

林論文（「知空による本願寺教団の教化活動―『御伝鈔照蒙記』撰述の背景を通して―」）では、江戸前期から中期にかけての学僧である知空を取り上げ、その著書『御伝鈔照蒙記』の撰述背景を探ることにより、知空研究、延いては江戸時代の仏教と教団形成の研究に新しい光を当てる試みである。江戸時代の浄土真宗研究に関しては、学史研究に集中してきた。このことは、江戸期には宗派ごとの学史が奨励されて成果が開き、やがて近代の緻密に統一テーマ化された学史へと引き継がれた立場からの研究が盛んなものとなってきたからである。歴史学分野での研究は、辻善之助の日本仏教史研究を古典とする研究の歴史観、すなわち、江戸期の仏教とは、鎌倉から室町、戦国にかけてピークの維持ないしは制度体制に組み込まれた墮落の時期である（そのうえで、宗派ごとの学史は奨励された）という歴史観に長らく基づいてきた。しかしながら、戦国時代から後、歴史学研究の表舞台からは消え、そして近代研究に再び巨大教団として現れる本願寺の、江戸期における社会的な位置や影響力などが欠けた *Ming Hongwanji* のままであった江戸期の研究は、大きく進展してきている。林論文は、そうした研究成果の一つである大澤絢子氏の指摘を取り上げる。肉食妻帯への外部からの批判に対して、教団の指導的立場にあった知空が『御伝鈔』には記述されていない内容の注釈を施すことで、当時の教団が抱えていた問題に対応する根拠を親鸞に求めていたという指摘である。そうした、大澤氏の指摘に注目し、林論文は、知空の他の著作も参照して著作活動の目的を探り、知空における、親鸞を根拠とした教団の形成と教学的営為を明かすことを試みている。

塚本論文（「初期真宗における集団の諸相」）は、親鸞と門弟の時代（「初期真宗」）に焦点を当て、理念でまとめた原初的集団から歴史的に形成されてくる教団へと移っていく、その最初の初動を捉えようとする試みである。教団論が問われるとき、しばしば「同朋」「平座」「門徒」などの理念に立ち返った論考が展開される。しかし一方で、それらの理念が現実の教団という歴史的現象とどのように関係してきたのかという論考には十分なものがない。教団を考えるにあたっての組織形成の要素が、理念的要素と歴史的要素とに分かたれたままの状態にある。さらに背後をいえば、理念レベルの議論において、教団とは、何らかの聖性（あるいは仏教の場合は釈迦以来の人から人への伝統ということになるか）によつて担保された集団なのか、それとも人間的な全き世俗の集団なのかという問いがある。塚本論文では、親鸞のいう「門徒」とは法然の念仏集団であることを明らかにしたうえで、交名牒などから親鸞の門弟が法義の伝承という集団から新たに地域や血脈という集団原理を持つにいたる初動を論じている。近年の親鸞研究では、史的事実としての親鸞研究と並行して、信仰の営みの中での親鸞像の研究も新たな展開を見せている。塚本論文はこうした研究の動向にもおおいに資するものである。

隅倉論文（「近世真宗における「教団教学」の形成過程について（序説）」）では、非常に興味深い「教団教学」という言葉が提出されている。教学とは「ある問いを前にした人が置かれたそれぞれの立場から、多様な視点から探求することが可能な営みの総体」と定義されており、また、教団教学とは「その時の教団において認知されている教学」と定義されている。さて、教学という用語をめぐっては、これまでにもさまざまな見解が出され、特に明治以降、各宗派において（一般社会においても）多くの用例もある（「教育」、「布教興学」教え学、学校における学問や仏教研究」など。また、学科を研習し智徳を養成する教学に対して、師資相承を重んじ宗義を研鑽する安居を分離する用例や、「宗学」との使い分けの用例もみられる）。そして、その方法論に関しても、明治以降さまざま

まに多く論じられてきている。二〇〇〇年代に入って方法論に関する論文がほとんど見られなくなっていたところに、隅倉論文が扱おうとするテーマは久々のものといえるであろう。およそ、「学」の成立には、原論・方法論といえるものと同時に、再現や検証が可能な体制といったものの成立が不可欠である。一定数以上の人数と一定期間以上の維持があつて体制は成立していくが、併行して原論・方法論も問われ続ける。隅倉論文では、信仰共同体である教団が主体として方法論に関与する側面（共有される教義）と、教団の歴史的存在である側面（時代的弁証である教学）とが、近世においてどのように形成されてきたかを論じる意欲的な試みである。

香川論文（「仏教における教団論―教団の存在意義―」）は、仏教の根幹に仏と法に並んで「僧（サンガ）」が三つの宝の一つとして二五〇〇年間にわたり敬い守り続けられたのはなぜか、その必然性を問うことが現代社会における教団の存在意義を問うことであるとするところから始まる。サンガの成立は、釈迦とその説法により阿羅漢となった五人の弟子たちからなる覚者の集まりであつた。しかし、出家した比丘・比丘尼が次第に増えるうちにサンガの維持に戒が設けられ、また、サンガの外の在家仏教者である優婆塞・優婆夷もサンガの維持のためにサンガ内の紛争解決に役割を果たしていた。香川論文は、そのことを部派伝持の律蔵から、釈迦在世時のコーサンビーでのサンガ分裂に対しての在家の者たちの対応を、闘争する出家者に対して布施を止め、尊重供養讃嘆しないという解決法をとつたことを、諸律にみている。ひとつ興味深いのは、諸律のなか、*Mulasarvāstivādinaya*では、在家者たちが、分裂する比丘たちと言葉を交わし布施をして支えている自分たちに過失があると省みていることである。サンガを敬重するものとして対象的にとらえるだけではないところの、在家の者たちのサンガを支える意識の深層がいかなるものであるのか、香川論文に発するさらなる議論が楽しみである。

「溪論文（「カルト問題」研究序説）」は、カルト問題について宗教団体からの声明等がほとんどないことに警鐘を鳴らすものである。溪は、日本脱カルト協会の理事もつとめ、カルト問題の実際に携わってきた経歴も持つ希少な人物である。当論文では、カルトという概念の整理を行い、「特有の（主として宗教的）言説を用い、公共の福祉に反する行為を行う団体」と定義して、その「公共の福祉に反する行為」を人権侵害として、経済的搾取、肉体的搾取、精神的搾取とする。確かに、宗教団体においてカルトが話題に上る場合には、その信仰内容に関して断罪するが如きの取り上げ方が多いと思われ、そのうえで声明等の発表ではエンドレスの批判合戦に陥り、信教の自由や名誉の問題と絡んで訴訟にも発展しかねないことから、等閑視するという傾向があつたのである。カルト問題とは、その信仰の内容が問題なのではなく、人権侵害が組織的に行われているという問題であるという溪の指摘は頷くところである。さらにこの定義は、自らが関わる宗教団体が問題性を持つか否かを再確認する作業にも用いることができる。長い歴史を持つ宗教伝統には、経験の蓄積ゆえに「カルト」に陥らないさまざまな装置が組み込まれているはずである。そのことを再確認することは、宗教団体にとって、社会への弁証という点でも重要である。論末には相当量の註が附されている。序説というにふさわしい充実した内容の註であるので、初学者にとつても必読の論文である。

遠山論文（「曇鸞研究の歴史と現状」）では、曇鸞研究史の上に研究者自身が先行研究を十分に把握しきれなくなりつつあるという事例が一九九〇年代初頭から現在に至るまでの間に散見されることを指摘している。また同論文では、そのような事例が生じる根本的な要因として、曇鸞研究そのものが膨大な蓄積量を有している点、ならびに、その膨大な研究史を束ねる文献目録が十分に整備されていない点とを挙げ、附録に「曇鸞研究文献目録」を掲載している。同目録は、曇鸞研究に関する既存の文献目録を質的にも量的にもはるかに凌駕しており、今後、曇鸞

研究に取り組もうとする研究者にとっては必ず参照すべき目録である。また、同目録に収録される末註書は、宗派別に分類され、それらがすべて年次順に作成されていることから、同目録は「曇鸞研究」のみならず、「曇鸞研究史」の研究や「中国浄土教研究史」の研究を進めていく際にも有用である。この点については今後の研究が俟たれるが、同目録は、研究の背景となる時代思潮や宗派性、あるいは各時代における宗学者・研究者間の相互交流の実態などを解明していく上での基礎的情報を提供している点で貴重である。なお、今回の目録は鎌倉期から江戸期にかけての目録であるが、明治期から令和期にかけての目録も機会を改めて公表される予定である。近代における曇鸞研究の目録の公表が、なんとも待ち遠しい。